

飼育員の仕事Ⅱ～人工哺育と研究～

福井 智太

飼育員の仕事のひとつに、「人工哺育」というものがあります。人工哺育は、「人間が母親代わりとなって、動物の赤ちゃんを育てること」です。テレビ番組などで取り上げられることもあるので、小さな命を救うために飼育員が奮闘する姿や、人に馴れた可愛らしい動物の姿を想像する人も多いのではないのでしょうか。しかし、人工哺育は様々な問題をはらんでいます。特に注意が必要な「霊長類（人間を含む、いわゆるサルの仲間）」は、家族や群れなど、社会の中で生活することが多い動物です。そのため、霊長類の赤ちゃんは、オトナになるまでの過程で、社会の中で暮らしていくために必要な、様々な能力を身に付けていきます。その中でも、特に重要であるコミュニケーション能力については、母親などの身近なオトナから学ぶことが多いのです。ところが、人間が母親代わりとなる人工哺育では、その動物「らしい」コミュニケーション能力を学ばせることができません。そのままでは、身体は成長したとしても、挨拶の仕方やケンカの後の仲直りの仕方などが分からないことから、群れに馴染めずに孤立したり、繁殖のための行動ができなかったりと、生涯にわたって、様々な問題が起こる可能性が高くなってしまいます。人工哺育は、小さな命を救ったつもりが、その動物の一生を辛いものにしてしまう恐れすらあるのです。本当の意味での「母親代わり」は、人間には務まらないとも言えるかもしれません。そこで、近年の動物園では、人工哺育を行う必要があっても、できるだけ早く親元に戻したり、親のすぐそばで人工哺育を行ったりと、その動物「らしさ」をオトナから学べるような環境づくりこそが重要だという考え方が、一般的になってきました。動物園がこのような考え方に至ったのは、過去の事例の検証や、様々な研究の成果を積み重ね続けた結果です。動物園は、動物を少しでも幸せにするために奮闘する、研究施設でもあるのです。